独立行政法人 国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

ー今月のショットー

ボランティアさんによる
病室でのバイオリン生
演奏

90 歳のおばあちゃんから
時々送られてくる編みぐる
み。今回は虹色のくま。

2014年　9月号

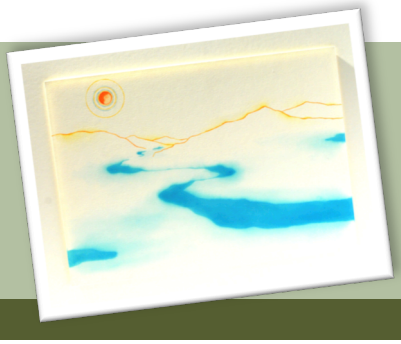
ー院内の小さな声からー

虹色ボランティアメンバーの薮内さんがお友達から譲り受けたという、色とりどりの小さなカードを沢山持って来てくださいました。そのカードには雑誌から丁寧に切り抜かれた写真が貼られています。四季折々の風景や絵画、お人形や花。切り抜いた写真に合わせて台紙の色も一つ一つ違っています。お友達が何十年も趣味で作り続けられたというカードを手に取って見ているとその方がどんなものを美しいと思っていたのか。伝わってくるような気がします。薮内さんとお友達の大西さん、鏡原さんが、そのカードにメッセージカードをつけて、プレゼントとしてニッチの中に入れる準備をしてくださいます。「かわいいお人形ですね！」「富士山いいですね。いつか登りたいですね。」これからプレゼントするまだ見ぬ誰かに向けたメッセージは、カードを作ったお友達に話しかけているようでもあって不思議です。「ちょっと。平山郁夫のばんしょうってどっちだっけ？」「晩鐘？」「晩照？」「さあ？」ニッチを通じて届けられる、この小さなカードから、また新たな楽しいおしゃべりが始まりますように。

ボランティアさんの願い

女性医療センターでは毎月、病棟コンシェルジュさんが「お茶会」を開いています。先日、そのお茶会で小さなバイオリンの演奏会が開催されました。演奏してくださったのは東城未帆さん。東城さんは当院の「虹色ボランティア」のメンバーです。どんな曲がいいのか。どれくらいの長さがいいのか。あれこれ話しながら、お茶会の開かれるデイルームへと向かいました。バイオリン演奏を間近で聴いた患者さんたちは、最初緊張した面持ちでしたが、その音色にだんだん心もほぐれ最後の「花は咲く」という曲では数人の患者さんがバイオリンに合わせて歌詞を口ずさんだり、体を揺らしたりしていました。その後、希望のあった方の病室を訪れ、童謡を演奏しました。意識のない患者さんもいらっしゃいましたが、ベッドサイドでバイオリンの弦が響きはじめると、病室全体にやわらかな振動が伝わり、患者さんも、ご家族の方も一緒に聴いていた師長さんや私も同じ毛布で包まれるような感覚を味わいました。東城さんの奏でるバイオリンの音色は耳からではなく、全身からしっとりと体の中にしみ込んでくるものでした。そして、患者さんやご家族の方の感動や感謝が、心の振動として演奏されている東城さんにも伝わり、病室に特別な時間と空間が出来上がっていました。東城さんは他病院でも子どもたちの病棟を訪れて演奏会を開いていらっしゃいます。演奏会は、毎年娘さんの命日がある8月に開催されます。「こうして私の演奏が少しでも病気の方の慰めになれば、娘も喜んでくれるのではないかと思って・・」と東城さんは話されます。その哀しみをはかり知ることは出来ませんが、私は東城さんが、その行動を通じて、娘さんとの関係を今も大切に紡いでいらっしゃるのだと感じました。そして、バイオリンを演奏する東城さんの後ろに、微笑んでいる娘さんの姿を見た気がしました。

今月の一枚



作家：清水　マコ　　未知の先

これらの絵が、やんわりと、じんわりと心にしみこんで、少しでも支えとなりますように。まだ見ぬ先へ進む力のカケラとなりますように。（自分の大切な人たちを想い、祈るような想いで描きました。）